

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：32704

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25893267

研究課題名(和文)動物介在活動の効果測定尺度の開発に関する研究

研究課題名(英文)A study of development of effectiveness scale of animal-assisted activity

研究代表者

木全 明子(Kimata, Akiko)

関東学院大学・看護学部・助手

研究者番号：40714291

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：これまでに動物介在活動の身体的・精神的・社会的効果が報告されているが、その効果の評価基準は、必ずしも動物介在活動に相応しいものではなく、その汎用性と利便は十分なものとは言い難い。今後、動物介在活動が補完代替療法としての有効性を高め、広く普及させるためには、その効果を簡便かつ適切に評価し、活動自体にフィードバックしていくことが重要となる。本研究は、動物介在活動の効果測定尺度(Effectiveness Scale of Animal-Assisted Activity:ESAAA)を開発することを目的とし、4段階で尺度化した全15項目のESAAA1次案を作成した。

研究成果の概要(英文)：The physical, emotional, and social effectiveness of animal-assisted activity has been reported; however, the basis of evaluation is not necessarily appropriate for animal-assisted activity, and not versatile and convenient enough. It will be important in the future to evaluate the effect of animal-assisted activity more easily and appropriately, and provide more feedback on the activity to raise its effectiveness as a complementary alternative medicine and help it to spread widely. This study aimed to develop a scale for ESAAA(Effectiveness Scale of Animal-Assisted Activity), and the developed scale was comprised of 15 items using a 4-point scale.

研究分野：医歯薬学

キーワード：動物介在活動 補完代替療法 尺度開発

1. 研究開始当初の背景

動物介在活動とは、動物とふれあうことによる情緒的な安定、レクリエーション、Quality of Life(以下、QOL)の向上等を主な目的としたふれあい活動である(日本動物病院協会, 2013)。近年、犬や猫などが家族の一員としてコンパニオン・アニマルと呼ばれるようになり、人と動物の絆が人間の生活に重要な役割をもつことが認識されている(田丸, 2003)。特に犬は触れ合うこと、意志疎通が可能であり、動物介在活動に最適な動物と考えられている(横山, 1996)。1970年代に獣医師、精神科医、獣医科大学関係者が中心となって米国で設立されたペットパートナーズ(旧デルタ協会)は、人間の健康、生活の質を改善するための動物を介在した活動を支援する目的で多くのプログラムを実践している。国内では、獣医師を中心とする日本動物病院協会が1986年より高齢者施設、病院で動物介在活動を実施しているが、事故やアレルギーの発生は生じていない(日本動物病院協会, 2011)。しかしながら、日本国内では、動物介在活動を実施している施設は少なく、その認知度も低い状況にある。これは、動物介在活動の効果を適切に測定する尺度の開発が遅れ、その効果が広く認識されていないためであると考えられる。これまでに動物介在活動の身体的・精神的・社会的効果が報告されているが、その効果の評価基準は、必ずしも動物介在活動に相応しいものではなく、汎用性と利便性は十分なものとは言い難い。今後、補完代替療法としての動物介在活動の有効性を高め、広く普及させるためには、その効果を簡便かつ適切に評価し、活動自体にフィードバックしていくことが重要となる。

2. 研究の目的

動物介在活動の効果を評価するための簡便かつ汎用的に用いることができる評価指標を開発する。

3. 研究の方法

(1) 尺度試案の作成

質問紙で用いる調査項目を検討するために文献データベース CINAHL、PubMed、医学中央雑誌 Web(Ver.5)を用いて、国内外における動物介在活動および動物介在療法について、現状とその効果の評価指標、評価方法の文献検討を行い、質問項目を選出した。動物介在療法は、動物介在活動とは異なる目的と利点を有し、人間の医療現場で、専門的な治療行為として行われる動物を介在させた補助療法であり、医療従事者の主導で実施し、治療を受ける人に合わせた治療目的を設定、治療後は治療効果の評価が求められる(日本動物病院協会, 2013)。更に20歳以上の入院患者6名を対象として、施設訪問型動物介在活動の前後に半構成的面接法を実施した調査結果(木全, 嶺岸, 2013)より、質問

項目を選出した。選出した質問項目の内容的妥当性、表現の適切性を検討するため動物介在活動を実施している獣医師2名、2病院の動物介在活動医療チームメンバー(医師、看護師、動物介在活動コーディネーター等)、看護大学教員による専門家会議を行った。その結果を元に、質問紙の項目内容とレイアウトを修正、幸福感、解放感、情緒的な安定の3カテゴリーからなる全15項目の Effectiveness of Scale of Animal-Assisted Activity(ESAAA)日本語版1次案を作成した。各質問項目については4段階で尺度化し、「0:あてはまらない」「1:あまりあてはまらない」「2:ややあてはまる」「3:あてはまる」とした。質問項目の内容は、対象者が理解しやすく、回答がしやすい項目とした。

(2) 調査1

対象者

18歳以上の入院患者10名程度を対象とする。犬に対する恐怖心がなく、動物アレルギーがない、見当識障害がないことを条件とする。主治医により、15分程度の動物介在活動が可能で身体的、精神的状態にあると判断され、研究参加の同意が得られた者とする。

調査施設

ボランティア団体による施設訪問型動物介在活動を週1回実施している1病院とする。

データ収集

動物介在活動の実施前後に対象者へ ESAAA1次案の回答を依頼し、分かりにくい質問項目等についてインタビューを行う。

動物介在活動の介在動物

日本動物病院協会の活動実施マニュアルと参加動物適性基準に則って、獣医師の管理の下、健康・しつけ・衛生面の基準を満たした犬または猫とする。ハンドラー(動物の飼主)は動物介在活動前日または当日に、動物の衛生管理(シャンプー、歯磨き、爪切り、ブラッシング)を行い、当日は健康チェックを行う。

動物介在活動の内容

場所は、調査施設内のプライバシーが保てる専用部屋とする。動物(6-8頭)とハンドラーが訪室し、対象者は他の入院患者と共に自由に動物と触れ合いを行う。内容は、動物を撫でる、握手をする、おやつを与える等とする。時間は、対象者1名につき15分間程度とする。人畜共通感染症防止のため対象者は動物介在活動前後に手指消毒を徹底する。動物介在活動後、ハンドラーは対象者の病衣に付着した動物の被毛を粘着テープで除去する。質問紙調査は、プライバシーが保てる場所で動物介在活動前後に実施する。

(3) 調査2

ESAAA1次案を修正した ESAAA2次案の信頼性および妥当性の検討を目的とする。

対象者

調査1と同一の適格条件とし、150名を対象とする。

調査施設

調査1と同じ1病院とする。

データ収集

患者特性(年齢、性別、診断名、愛玩動物の飼育歴、動物介在活動の参加回数)、動物介在活動前後に ESAAA2 次案、日本語版 Profile of Mood States(以下、POMS)短縮版を用いる。POMSは、気分、感情の状態を評価する自己記入式質問紙として McNair らにより米国で開発された(横山ら,1990)。POMS短縮版の信頼性は、POMSと比較して大差がなく、同様の測定結果を提供することが実証されている(横山,2005)。調査の依頼は、調査1と同一とする。

動物介在活動の介在動物

調査1と同一とする。

動物介在活動の内容

動物介在活動は、調査1と同一の方法で行い、対象者1名につき1回の動物介在活動で終了とする。質問紙調査は、プライバシーが保てる場所で動物介在活動前後に実施する。質問紙は、調査施設内に設置した回収箱によって回収する。

(4) 倫理的配慮

本学および調査施設の倫理委員会の承認を得て実施した。調査1、調査2において、対象者に研究の主旨を書面と口頭で説明し、同意が得られた者を対象とした。

介在する動物への倫理的配慮は、動物の愛護及び管理に関する法律(最終改正:平成25年6月12日法律第38号)に基づき、倫理的配慮を行った。

4. 研究成果

(1) 文献検討

文献データベース CINAHL、PubMed、MEDLINE、医学中央雑誌 Web(Ver.5)を用いて、国内外における動物介在活動および動物介在療法の現状とその効果の評価指標、評価方法について、過去10年間の文献検討を行った。

文献検討の結果、動物介在活動の対象は小児から高齢者まで幅広く実施されていることが明らかとなった。国内では、終末期がん患者、精神疾患患者、認知症高齢者が主な対象となっていた。

動物介在活動の評価法は、既存の尺度、生理学的指標、参加観察法などが使用されており、動物介在活動の効果を評価する尺度は開発されていない。評価指標としては、質問紙(POMS、Self-Perceived Health Questionnaire、気分調査票等)、フェイススケール、ペインスケール、生理学的指標(血圧、脈拍、SpO₂、唾液コルチゾール)、ビデオ録画、参加観察法、半構成的面接法が用いられていた。使用されていた質問紙の評価項目は、身体症状(疼痛、呼吸困難感、嘔気/嘔吐)、精神状態(気分、緊張、不安、怒り、抑うつ、無力感、攻撃的感情、健康に対する自己認識、自尊心)、QOL、認知機能等であった。

動物介在活動の本来の目的である情緒的な安定、レクリエーション、QOLの向上を包括的に評価した研究は見られず、既存の尺度のみでは汎用性と利便性は十分なものとは言い難い。一方、動物介在療法の効果評価用尺度としては「Template for Guiding & Evaluation Animal-Assisted Therapy」が開発されている(Velde,2005)。この評価指標は、ペットパートナーズ、療法士が行った過去の実施調査を通じて、動物介在療法セッション・訪問におけるリファレンスガイドとして作成され、身体能力、認知能力、社会性/感情、言語聴覚能力の4領域、31項目から構成されている。

文献検討を踏まえ、今後動物介在活動が補完代替療法としての有効性を高め、広く普及させるためには、その効果を簡便かつ適切に評価する尺度の開発が必要と考える。また、評価方法については、対象者の身体的負担を考慮すると、項目数が少なく、簡便な指標を用いることが望ましいと考える。

(2) 調査1

ESAAA1次案を用いて、入院患者8名(男性2名、女性6名)、平均年齢44.3歳(19歳~74歳)を対象として調査1を実施した結果、回答に偏りのある項目は無かった。調査施設の動物介在活動医療チームメンバーと共に、質問項目の表現の見直しを行い、分かりにくい質問項目を修正した上で、全項目が理解可能な内容であることを確認した。

(3) 調査2

調査1の結果を踏まえ、ESAAA2次案の拡大評価を進めている段階である。今後の課題としては、対象者が150名となるまで継続してデータ収集を行い、ESAAA2次案の信頼性および妥当性の検証を行う。

<引用文献>

日本動物病院協会、アニマルセラピー/CAPP活動、[http://www.jaha.or.jp/contents/modules/sect5/index.php?id=1\(2013.5.1閲覧\)](http://www.jaha.or.jp/contents/modules/sect5/index.php?id=1(2013.5.1閲覧))

田丸政男、アニマルセラピー、医療従事者のための補完・代替療法、今西二郎、金芳堂、2003、199-206

横山章光、アニマルセラピーとは何か、日本放送出版協会、1996、175-226

日本動物病院協会、CAPPボランティア講習会資料、2011

木全明子、嶺岸秀子、動物介在活動が終末期がん患者の心身に及ぼす影響、日本がん看護学会誌、27巻、3号、2013、63-70

横山和仁ら、POMS(感情プロフィール検査)日本語版の作成と信頼および妥当性の検討、日本公衆衛生雑誌、37巻、11号、1990、913-918

横山和仁、POMS短縮版 手引きと事例解説、金子書房、2005、1-9

Velde,Sarah, The development and

validation of a research evaluation instrument to assess the effectiveness of animal-assisted therapy, Ph.D. in Health Administration, Kennedy-Western University, 2005,198-202

5 .主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1 件)

Akiko Kimata, Current trend and issues on animal-assisted activity and animal-assisted therapy with dogs in cancer care, 18th International Conference on Cancer Nursing, 2014.9.8, Panama City(Panama)

6 .研究組織

研究代表者

木全 明子 (KIMATA, Akiko)

関東学院大学・看護学部・助手

研究者番号：40714291